

七
伏

白秋全集

11

歌集

6

白秋全集 11

第一九回配本(第1期一、二四卷)

一九八六年六月五日 発行

定価三五〇〇円

著 者 北 原 白 秋

発 行 者 緑 川 亭

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
番地
発 行 所 緑 川 亭
岩 波 書 店

電話 〇三二五二
振替 東京六二四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

『溪流唱』

溪流唱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・七

溪流唱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・八

黄鶴鶴(二) 冬に咲ふ(二)

溪流に向ひて(二) 冬の山葵田(二)

深夜に聴く(二) 世古の湯にて(二)

また或る時(二) 霜 風(二)

また或る時(二) 春雨くだる(二)

寒 暁(二) 寒木瓜(二)

音・光・風・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三

山葵田(二) 鉢窪山(二)

重砲隊(二) 白浜の砂丘(二)

初夏の茶寮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一七

池のそばにて(二) 同じく茶寮にて(二)

茶寮にて(一〇)

雪冠・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 一九

雪冠・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二〇

スキー雪景(二〇) 雪溪夜行(二)

水戸頌・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二三

水戸頌・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二四

水戸弘道館(二四) 西山荘(二五)

志士墓地(二四) 借樂園早春(二六)

清香亭(二四) 河童早春譜(二〇)

秋夕夢 小河内三部唱・・・・・・・・ 二三

山河哀傷吟・・・・・・・・・・・・・・・・ 二四

水上(二四) 騎牛(二五)

蓬萊の懸崖(二五) 村人に代りて(二六)

秋夕夢(二六) 二十十日(二〇)

鶴の湯(二七) 峽谷の蝶(二〇)

深夜に聴く(二八) 昼に聴く(二二)

獅子舞の歌(四二)

鷺(四四)

山河愛惜吟

そのかみの小河内を思ふ(四六)

敲冬一夜吟

霜夜に聴く(五〇)

村人の感情を(五二)

陳情隊に代りて(五三)

新聞の記事と写真を見て(五三)
霜朝(五四)

多宝塔

信貴山

大阪へ飛ぶ(五五)

信貴山(五九)

前夜月明(五九)

大会第一日(五九)

第二日(六〇)

鹿寄せ

音聞山

楓の庭(六三)

つくばひ(六四)

午後講演会を開く(六〇)

夕光(六〇)

月明(六一)

第三日朝(六一)

石と橐吾(六四)

蟬を聴きつつ(六四)

泉州吟・・・・・・・・・・・・・・・・・・空

仁徳天皇御陵(六五) 妙国寺(六五)

伊勢・・・・・・・・・・・・・・・・・・奄

伊勢・・・・・・・・・・・・・・・・・・穴

はなむけ(六六) 宇治橋(六六)

続伊勢・・・・・・・・・・・・・・・・・・芒

宇治橋(七〇) 二見ヶ浦(七一)

老幼(七一)

京・・・・・・・・・・・・・・・・・・芒

金閣寺(七二)

枯山・・・・・・・・・・・・・・・・・・莖

磯部行・・・・・・・・・・・・・・・・・・茨

冬朝観望(七六) 湯にこもる(七七)

鶏市・・・・・・・・・・・・・・・・・・戌

上州磯部(七八) おなじく(七八)

達磨市・・・・・・・・・・・・・・・・・・公

夏鳥・・・・・・・・・・・・・・・・・・三

雲仙つつじ・・・・・・・・・・・・・・・・四

嶋原・・・・・・・・・・・・・・・・・・五

伊王嶋・・・・・・・・・・・・・・・・・・六

慶州夜行 新羅抄その一・・・・・・・・七

夜市(六七) おなじく(六七)

田鶴(六七) 噂を二首(六七)

路上(六七) 或る駅(六七)

秘苑 新羅抄その二・・・・・・・・・・八

夏鳥・・・・・・・・・・・・・・・・・・九

朝山(九二) 巢のある谿(九三)

樹林にて(九三) 籠坂を越えつつ(九三)

浅間神社前(九三)

『椽』

風塵四季・・・・・・・・・・・・・・・・一〇

春昼牡丹園	101
春昼牡丹園(101)	
藤浪(101)	
緑草偽装	104
草の香(104)	
遠く見て(104)	
童女現像	105
頬づゑ(105)	
秋口(105)	
ある夜(105)	
山百合(105)	
颱風の頃(105)	
霜折	107
藤もみぢ(107)	
仔猫(107)	
登戸即興(107)	
朱	109
早朝(109)	
高蔵寺をたづねて(109)	
柿生(109)	
王禪寺秋色(109)	
またその後をたづねて(109)	
おなじく(109)	
砧	114
新居雪景	117
雪と猫(117)	
雪の庭(117)	

八つ手をまた(二六)	雪解(二〇)
離家の前の池(二六)	雪晴(二二)
小禽(二二〇)	

春分・・・・・・・・・・・・・・・・三

鷺二種(二二)	春夜(二五)
雪片(二二)	春分(二六)
春雪(二二)	巢函(二六)
春寒(二二)	雨にこもる(二六)
P. C. L. 近景(二二)	春雨の松(二六)
水の輪(二二)	銀屏(二六)
おなじく(二二)	その花を活けて(二六)
男童(二二)	白猫(二六)

合歓若葉・・・・・・・・・・三

若葉勤む・・・・・・・・・・二〇

牡丹と藤(二〇)	朝(二二)
晩春(二〇)	立夏(二二)
金魚(二二)	若葉勤む(二二)
雨夏めく(二二)	羽蟻(二二)
若葉騰る(二二)	或る静物画(二二)

壁鼠の歌・・・・・・・・・・三

前夜(二六)

白南風(二三)

故郷びとに(二七七)

壁鼠(二三)

その日に(二七)

鳩と雉子(二三)

虚.....一五

梅雨の頃(二二六)

蟻(二四)

或る真昼(二四〇)

執行(二四三)

えごの花(二四二)

小池(二四三)

合歓萌ゆ(二四二)

鼠子(二四四)

谷地(二四二)

百日後(二四四)

合歓花さく(二四二)

秋夕賦.....一四

木星の下.....一四

立秋(二四〇)

鯉(二五〇)

短夜(二四〇)

木星の下に(二五〇)

雀を観る(二四〇)

水の音(二五二)

暑さ残る(二五〇)

井戸さらへ(二五二)

中秋草に遊ぶ.....一五

妻と(二五二)

谷地の秋(二五二)

庭の秋色(二五二)

観法(二五二)

草にゐて(二五)
氣先(二五)

池のそば(二五)

橡
つるばみ

橡

秋 夕(二五)

玉蘭の果(二五)

猫と虻(二五)

合歓の秋(二六)

冷氣迫る(二五)

中秋名月(二六)

紅葉箋

落葉松(二六)

短 日(二六)

諏訪に下る道にて(二六)

玉蘭と桐(二六)

閑 日(二六)

朱と黝(二六)

月夜二趣(二六)

風しばしば(二六)

秋 夕(二六)

続紅葉箋(二六)

影とあるもの

葉牡丹(二六)

月夜漫步(二七)

月 光(二六)

影とあるもの(二七)

冬の雷

貧窮哀傷	170
妻と子(一七〇)	
死顔(一七二)	
冬の雷(一七二)	
死と生(一七三)	
緋連雀	171
早春賦	172
緋連雀の来る頃(一七二)	
玉蘭と雀(一七二)	
春塵	173
小綬鶏(一七三)	
隣の松(一七三)	
玉蘭(一七三)	
隣家(一七三)	
王禪寺梅林(一七三)	
鳥獸実験所	174
狸(一七四)	
虎猫(一七四)	
あやしき鶏(一七四)	
鴛鴦(一七四)	
鶴(一七四)	
山鳥(一七五)	
標本室の一二(一七五)	
道のあとさき(一七五)	
雉子(一七五)	
青水無月	177

晩春賦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一六

春うとし(二八)
大暑(二九)

我が像をとらせつつ(二八)
薄暮に(二九)

七月六日(二九)
立秋(二九)

鵜・鴨・鷺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一七

鵜(二九)
鴨場の池(二九)

高尾薬王院唱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一八

精進のともがら六十九人なり
実作指導のため見晴台へ吟行

(二九)
す、その道にて(二九)

薬王院前(二九)
講堂にて(二九)

茶亭にて(二九)
下山の前夜(二九)

閉関・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一九

初出(雑誌・新聞)

(一九三三(昭和八)年)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一九

浜名の鴨七首(二九)
大森長歌一首短歌一首

湯崗子の春四首(二九)
(三〇)

冬夜醉歌五首(三〇)
本門寺洗足の池馬込緑ヶ丘

山中湖 七首(三〇)

浜名巡航 五首(三〇)

松の内 五首(三〇)

〔白梅に寄せて〕 一〇首(三〇)

叢根 五首(三〇)

ありし日の千櫓 一首(三〇)

本興寺林泉 その二 二九首

(三〇)

山内 懸樋の音 林泉 矚目 婦

途 白須賀

奉天北陵 二四首(三〇)

瀋陽東陵

軍馬 一五首(三〇)

天王寺墓畔吟 一〇六首(三二)

小序 新居 五月空 朝花 新

墓をさへも 扇骨木垣 若葉と

鋪道 朝涼の墓地 桐の花曇

昼貌 日中蝶 真昼 塔影 露

仏 夏の浅夜 梅雨づく雲 白

秋の墓 祭の夜 月夜の墓畔

百日紅咲く 朝露 月夜の庭

雪 寒 初冬 冬の日向 冬木

墓の卵 二四首(三三)

風の夜 郁子と通草 初蛙 蛙
子の生るる頃 春朝 湿り田

庭園の晩餐 六首(三三)

天蛾 葡萄と月 ある月の夜

通草と雨 一四首(三三)

落椿 内庭 田園の春

麦秋の頃 一五首(三三)

草堤にて 蛙を聴く

月と忍冬 一〇首(三三)

庭前小情 八首(三三)

雲を観る 長歌一首 短歌四三

首(三七)

西湖 本栖湖 同じく 筑波

雲を観る 新宿風景 六月七日

浅宵 草堤白日吟 七月八日夜

驟雨

積乱雲 七首(三三)

十六夜 一三首(三三)

旱天にて田は植えずじまひにな

りぬ ある散策

庭前立秋 八首(三三)

晚夏小情 七首(三三)

成城学園を思ふ歌 一四四首

(三三)

雑草に思ふ 小原先生辞職声明

小原先生送別会 母の館父兄会

小学部 我が子 母の館父兄大

会 成城ボーイ 反動の職員た

ちに 真実を觀よ 六月三日

ある日の朝礼 三沢校長辞職

三会堂にて ある夜の父兄実行

委員会 告訴す 女学部 或る

母たちに 一部の同窓生と学生

に 高台の一人なるもの 新聞

利用 小原先生におくる歌 感

深し

十七夜 五首(四六)

八月浅宵

楚 一九首(四八)

庭前秋雨 燈火管制の夜 演習

の秋 秋旱 初秋の一夜 八月

浅宵

半島月夜吟 四首(四八)

続天王寺墓畔吟 五八首(四八)

春昼 珠数工 墓地前 動物園

所見 門庭・中庭 父母と 新

墓 朝東風に 夏真昼 朴と弦

月 月昼のごとし 黒雨風 彼

岸会のころ 墓の隈 月夜の庭

百日紅 塔影 冬の夜の雨雪

の薄暮

(一九三四(昭和九年) 二五)

素硝子 三九首(五〇)

麻布第三聯隊 朝霧 冬の杉

緑ヶ丘 雪の夜 椿咲く 初夏

の墓地 月夜 鳥声 浅宵 蝶

影 春疊籠居

短夜調 一三首(五七)

女童 草上昼餉 短夜追憶

木樹の春 二五首(五七)

春昼落花 春朝の雨 風の夜

吾が門 五月 春の蚊立つ 築

山の麓咲く 春雨を待つ 楓紅

葉 木樹の冬

百合木 一二首(六一)

緑ヶ丘の家 砧村の夏

夜はひびく 四〇首(六一)

朴はひらく 朴の花落つ 櫻の

花季 羽虫 月光人のごとし

深夜の墓地 梧桐の花落つ 彼

岸前の夜 残暑 深更月夜 冬の夜雨 寒月 或る母と子 失火多し 春来る

馬込緑ヶ丘 三九首(三六)

新居 昼貌 出現 黄なる風景 架工風景 初秋の朝 或る夜の月 夜、風に思ふ 庭隈 月夜 静座 寒空 刺製の栗鼠 寒暄

霜風 一五首(三七)

緑ヶ丘雑唱 長歌一首 短歌六

○首(三二)

朝戸 蟻子の立つ頃 嵐来る
盆地の蛙 晩景 雨 梧桐咲く
隆太郎 卵 秋ちかき 洗足の池
ゆりの木と猫 溪の馬込
夕月映 庭隈 ある霧の夜 良
夜 霧、雨、月 ある宵 錦木の秋
落葉の庭 霜ばしら 冬の日
妹の家 牧舎 冬の土 冬の道路
白き野菜 門

地響 二一首(三七)

新樹の頃 砲車タンク 蕎麦進 兵卒
少年騎馬隊 桜を思ふ

句 四首(三七)

遅日 秋夕 月光

日の大皇子 一七首(三七)

その前日 御生れの日 畏きあたりを

珠雞 一一首(三八)

塔影

砧村雑唱 二四首(三八)

水田初夏 神宮の初夏 青一色
夕べの青田 向日葵童子 床の間
球根 雑木々 寒 冬の田
竹山 鼠と猫

「短歌朗吟の研究」序歌 六首

(三八)

葉牡丹の庭 長歌二首 短歌四

首(三八)

ピアノ

秋の日 一二首(三八)

野鴨

冬の日の父 長歌五首 短歌二

四首(三八)

鶉飼 同じく 宵寝 老の賀宴
噴ばえて 同じく 信心 同じく
老衆 冬の日

わが母 長歌二首 短歌五首

(三八)